生活文化史

Seikatsu Bunkashi

＜史料館だより＞

目　次

◇結びの文化
ー史料館で開催中の企画展「結び」に関連してー……杉浦　昭典　2
◇神戸市東灘区旧本庄村西青木地域の
石造遺物分布調査報告……望月　浩　5
◇史料館日誌抄……道谷　卓　12

1998.3.10
NO.23

北青木墓地内　弥陀座像板碑▶
（本誌５Ｐ参照）

神戸深江生活文化史料館

結びの文化

―史料館で開催中の企画展「結び」に関連して―

史料館館長　杉浦昭典

「結び」は「陽と陰が相集まって新しいものを創造すること」即ち「天地万物を生み、また成長させる霊妙な力」という意味の「産霊（むすび）」に通じる。息子は「むすびひこ」、娘は「むすびひめ」の略称である。あるものが単独では持つことのできない力を他のものと合体することによって新たに獲得するというところに「結び」の神秘性がある。「結び」が呪術的であったり、祈占用となり、また儀礼用となって今日まで伝えられて来たいわれがそこにある。

縄文時代の縄文とは縄目文様のある土器に由来するが、縄目の文様があるということはこの時代の人々が紐や縄を使って作る「結び」と無縁ではなかったという証しである。縄文文化の草創期は紀元前一万年頃であったともいわれるが、そんな大昔でも人間は縄を作り結ぶことを知っていたのであろうか。大昔から、植物の蔓や繊維、動物の皮、人間の毛髪などを素材として「撚る」「編む」「組む」のいずれかの方法で縄を作って来たであろうことは推測できる。ただ、これら有機物質を原料とする縄は時が経てば自然に消滅してしまうので、その痕跡は墳墓などの遺跡から発掘された壁画や土器、埴輪の類いから僅かにうかがい知るのみである。

したがって、縄を使う「結び」もまた縄や紐の歴史とともにきわめて古くからいろいろと考案されて来たはずである。「結び」は実用にはじまり装飾に発展したと考えられるが、実用と装飾の両方を兼ねるものも少なくない。とにかく人間にとってはかなり魅惑的であり興味をそそるものであったに違いない。なお英語で縄はロープ、縄文はストローロープ・パタンというので縄文の縄は藁縄である。

紀元前三三四年、東征途中のアレクサンドロス大王は、小アジア中央高地の西部地方にあった小国フリュギアの古都ゴルディオンに着いた。この都の神殿にある太い柱には、古い戦車が一台、なげしにかけたロープで幾重にも固く結び付けられてあった。「このロープを解いたものこそ全世界の覇王となるに違いない」という神託のあることを知った大王は自らの手でそのロープを解こうと試みたが全く歯が立たなかった。そこで業を煮やしたあげく、遂に大王は剣を抜いて結び目を切り捨ててしまった。

ところが、神託通り、やがてアレクサンドロスはヨーロッパとアジアの両大陸にまたがる大帝国の大王になることができたのである。このことから英語で「ゴーディアン・ノット（ゴルディオンの結び）を切る」といえば「一刀両断の処置を取る」という意味の格言になった。もちろん、これは伝説に過ぎない。実際にはどんなに複雑な結び目であっても、結んだものである限り手間さえかければ必ず解けるものである。このとき使われていたロープは革紐であったかも知れない。

一九七八年四月、大阪府にある五世紀の古市古墳群の中から大小二種類の修羅が見つかり、「古墳石室用の巨石を運んだ輸送用具」として話題になった。インドネシアの一部で、非常によく似た木製橇形の修羅が、墓石運搬に利用されていることはよく知られていたが、そのルーツを溯ると古代エジプトやメソポタニアに至る。エジプトの壁画には、橇に乗せた巨像を大勢の奴隷が四本のロープで引く光景を描いたものがあり、修羅とそっくりに見える。修羅とはインド神話の鬼神、阿修羅のことで、喧嘩相手の帝釈天を走らせた。

そこで帝釈を大石（たいしゃく）にかけ、修羅の名ができたというわけである。

古墳から発見された修羅の場合、引き綱をどのような方法で結んだのか、詳しいことは分からない。七世紀から八世紀にかけての歌を集めた『万葉集』の中にも「結び」にかかわるものはあるが、その技法まで読み取ることのできるものはない。八世紀のものという正倉院御物の中に見る数種類の結び方から、僅かに当時の「結び」の存在を知ることができる。

古代の船乗りは船をつなぎ止めるのに石をロープで縛って海底に沈め、また水深を測るのに使う長い竿が海底に届かなくなると代わりに重りを結んで吊るしたロープを用いることを考え出した。魚を捕る網を作り、釣針を釣糸に結ぶ方法など漁師にとっても「結び」は早くから欠かせない技能であった。これらの結び方はいわゆる「作業結び」である。

古代のエジプトやギリシャにおける土木建築工事にはそれまでの船乗りが考案した「作業結び」が活用されたといい、日本でも遣隋使船や遣唐使船によってもたらされた大陸文化の中に「結び」の技法があって、土木建築だけでなく輸送や農業などいろいろな職業分野での「作業結び」として活用されたであろうことは想像に難くない。大陸から伝わった「結び」の中に儀礼用の「装飾結び」があったことも事実である。

「結び」はまた古くから呪術的な意味を持つものと見なされて来た。誰でもが知っている「本（ほん）結び」は別名「細（こま）結び」、「真（ま）結び」、「玉（たま）結び」などともいうが、古代ギリシャではこの「本結び」を伝説の英雄ヘラクレスになぞらえて「ヘラクレスの結び」と呼び神秘的な「結び」とされていた。洋の東西を問わず、「本結び」が夫婦の契りを固める印と見なされた例は少なくない。

また日本には、霊魂が身体から遊離して行くのを鎮め止めるため衣服の一部を糸で結んだり、衣服の紐を結んだりする「魂（たま）結び」と呼ぶ呪術があったそうであるが詳しくは分からない。『袋草紙』に伝えられる浮遊する人魂に出会ったときに「魂は見つ主は誰とも知らねども結びとどめよ下がひのつま」という歌を三度誦して、男は左、女は右のつまを結び、三日後にこれを解いた風習のことではないかという。

その他、本居宣長の『玉勝間』には「讃岐国人女をよばふに藁を結びておくる事」として、二本の藁のそれぞれの一端に「一重結び」を作り他端を相手の結び目に少しずつ通したものを女に手渡すと、断るときには藁を引き抜いて二本に分けたものを返し、承知の場合は左右の結び目を真ん中に引き寄せた「相引き結び」を作って返すという話があり、また菅江真澄の『真澄遊覧記』にも奥州南部の話として結び文を左右より差し合わせてやれば、女がよし（可）と思うときはその結びを一か所に引き寄せて返し、いな（否）というには男のくれたままで返すということが述べられている。

十八世紀から十九世紀にかけて帆船が地球上のあらゆる海を駆け巡っていた時代には風だけが頼りであった。だだっ広い洋上で行くことも帰ることもできない無風に悩まされた船乗りの風を求める声は切実そのものであり、まさに「溺れるものは藁をもつかむ」心境であった。そんな時代、ラップランドやフィンランド、イギリスのシェトランド諸島やスコットランドの港には魔女のような風貌の風を売る老女が出没していたという。

スコットランド東部の港町ストーンヘブンの場合、老女は三つの結び目がある赤いリボンを売っていた。帆船の船長たちはそんなリボンを買い求めて出帆し、航海中、風が止んで困ったとき、リボン

の結び目を先ず一つ、次いで二つ目を解きながら祈るのであった。最初の結び目には微風が、次の結び目には強風が封じ込められていると信じていたからである。最後の三つ目の結びは無病息災のまじないとして解くことがなかった。これらの結び目は多分一番簡単な端止め用の「一重（ひとえ）結び」ではなかったかと考えられる。

「結び」は文字や計数の記録にも使われた。近いところでは沖縄の藁算があり、古くは中国における結縄の政がある。南米アンデス山系の高原地帯にあったインカ帝国のキープはとくに有名である。一五三二年に滅びる最後まで文字を使用しなかったこの国では、記録のすべてを縄や紐の結び目と色分けによるキープと呼ぶ方法で行っていた。日本語で「玉梓（たまずさ）」とは手紙のことである。これは梓の木の枝に糸や布片で「玉結び」を作ることによって意思を伝えたという故事によるもので「草結び」も同様である。

生活の中で使われて来た「結び」には大航海時代以来の船乗りが考案し世界中に広めたものも少なくない。その昔、ヨーロッパからのアメリカ移住者は開拓生活の中に航海中の船上で覚えた結び方を取り入れ、カウボーイの馬具や服装にもその名残りが見られた。代表的な「装飾結び」であるマクラメのような結び編みの技法も船乗りによって伝えられた。マクラメは刺繍したベールという意味のアラビア語ムカラム、またはフェイス・ナプキンとかタオルとかいう意味のトルコ語マクラマのどちらかがフランス語となり、英語にもなったのだといわれている。

ベールにせよ、タオルにせよ、どちらにしても紐を編んで作った縁飾りを付けるところはよく似ている。平結びと巻結びを基本とするマクラメの技法は非常に古くからあったといい、八世紀頃ムーア人がスペインへこれを伝え、十二世紀頃十字軍がイタリアへ持ち帰り、主として寺院の装飾や僧服の房飾り用いるようになったのである。ムーア人も十字軍もマクラメの技法と作品を運んだのは、海路、船によってであった。今日でもアメリカのインディアンに伝わるレース編みの技法は、十五世紀以降、その先祖がヨーロッパ人と接触する過程で身につけたものである。マクラメだけでなくさまざまな「結び」が十九世紀に至るまで帆船によって運ばれたのであった。

船の速さはノットという単位で表す。一ノットは毎時間一海里の速力である。一海里は地球の平均子午円の中心角一分に対する地表上の長さで国際慣行により一、八五二メートルとされている。帆船は速力をハンド・ログという道具で測った。リールに巻いた細長いロープの先端部に、円弧の部分に鉛の重りのある六分円形木板を取り付けて船尾から流し、砂時計で計測する一定時間内に走り出たロープの長さから速力を推定したのである。ロープには速力推定の目印として、一定間隔の子縄による目盛りがあった。目盛りの子縄には、一つ、二つ、三つという風に順に増える結び目（ノット）が作られていた。走り出たロープの目盛りの結び目すなわちノットの数がその時の速力を示したというわけである。

「結び」は衣服を着用するための手段でもあったが、やがてそれは衣服の装飾としても使われるようになった。縄や紐など最初は単色の素材であったものが、彩色したものを組み合わせることによって装飾の度合いが高められたことはいうまでもなく、伝統の組紐はその好例である。装飾用の結び方を「花結び」といい、平安時代から明治大正に至るまで宮廷関係の女人にとっては日常的なたしなみの一つであった。茶道や香道にも「花結び」は使われている。しかし「結び」は特定の階級や職業集団だけに関わるものではなく広く一般の日常生活にも浸透していた。ただ和装から洋装に変わったように生活様式の変化が日常的に結ぶ機会を無くして来たことも事実であり、影を潜めつつある生活文化の一つであるといえよう。

神戸市東灘区旧本庄村西青木
地域の石造遺物分布調査報告

史料館学芸員　望月　浩

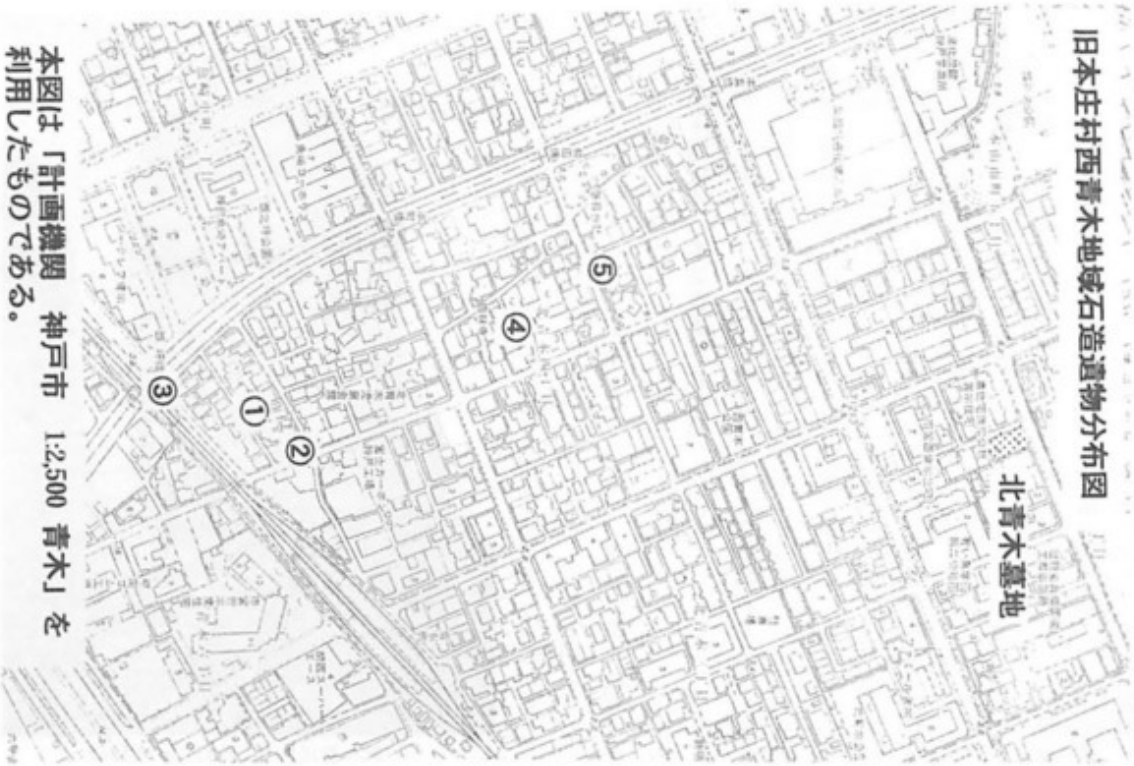
一、はじめに

筆者は、本誌十九号「神戸市東灘区深江地域の石造遺物分布調査報告」で、旧本庄村の深江地域の石造遺物の調査報告を行なった。今回は、西青木地域の石造遺物の調査報告を行ないたい。なお、地域内には西林寺・春日神社があるが、西林寺内には、特に石造遺物は見られず（以前には境内に多くの地蔵があったが、土中に埋めてしまった）、春日神社境内の石造遺物は、筆者が本誌二十号の「神戸市東灘区旧本庄村の神社境内にある石造遺物分布調査報告」で調査報告をしているので参照していただきたい。

二、西青木地域の歴史的概観

西青木地域は、戦国時代には摂津国兎原（うばら）郡山路庄に属する村のひとつであった。近世に入り、はじめは大坂藩領地、元和元（一六一五）年には幕府領に、同三年には尼崎藩領、その後明和六（一七六九）年にはまた幕府領になった。近代にはいり、明治二十二年に本庄村が成立し、西青木は本庄村の大字となった。昭和二十五年に本庄村は神戸市に合併し、この年から昭和四十六年まで本庄町を冠称した。昭和四十六年からは北青木一～四丁目、青木一～六丁目、本山南町一～九丁目の一部になっている。戦前までは農業が盛んな地域であったが、戦後は市街地化している。

旧本庄村西青木地域石造遺物分布図



本図は「計画総図　神戸市　1:2,500　青木」を利用したものである。

三、北青木墓地内の石造遺物（墓石を除く）

北青木墓地は、本山南町四丁目に位置し、レンガ造りの火葬場があった所である。西青木村の墓地であるが、火葬場だった頃は、墓地は青木六丁目の阪神電車青木駅西側の踏み切りのすぐ南東にあった。現在の墓地内の北西角は無縁墓地になっており、一番北の端が一段高くなっていて、②～⑦が所在する。南の端に①が所在する。無縁墓地前の六地蔵は近年建てられたものである。

①　阿弥陀石仏

舟型光背に、仏像が陽刻されている。現高五十三㎝、最大幅二十七㎝。正面上部に風化が激しいが、弥陀座像と思われる仏像が陽刻されている。頭部には肉髻（にっけい）と呼ばれる、肉が隆起したものが確認される。花崗岩製で、室町時代後期のものと思われる。

北青木墓地内①　阿弥陀石仏

②　弥陀座像板碑

頭部が舟型になった板状の正面に、弥陀定印を結んだ弥陀座像が陽刻されている。花崗岩製。像容の上には、幅いっぱいにのびた突起した部分が見られる。一般的に切り込み型をした二条線が見られるのだが、これは簡素化されたものと思われる。室町末期のものと思われる。現高は五十八㎝、幅二十三・五㎝。像容はあまり厚く彫られておらず、風化が目立つ。

北青木墓地内②　弥陀座像板碑

③　弥陀座像板碑（本誌表紙写真参照）

四角柱で、頭部が少し後よりに頂点をもつ四角錐になっており、正面上部に切り込み型の二条線が見られる。その下に、光背を意識して舟型に彫り窪めた中に、定印弥陀座像を半肉彫に陽刻している。花崗岩製で、現高五十八㎝、下幅は二十五㎝、奥行は二十㎝。像容は高さ十八・五㎝である。室町末期の物であると思われるが、もう少し時代が古いかもしれない。花崗岩製。

④　六地蔵

④～⑥は、現在の六地蔵の前に、墓地内に建てられていた六地蔵と思われる。いずれも火災にあったのか破損が目立ち、赤茶けて錆びたような色になっている。砂岩製で、舟型光背の正面に合掌印を

した地蔵立像が陽刻されている。下方には蓮華座が見られる。総高は八十二㎝。時代は不明。

⑤　六地蔵

④と同形式であるが、両手で幢幡（どうばん）と呼ばれる仏具を持っている。上部が破損しており、現高六十八㎝。

⑥　六地蔵

④と同形式であるが、両手で柄香炉（えこうろ）と呼ばれる仏具を持っている。総高八十二㎝。

⑦　弥陀座像石仏

やや不整形ながら、舟型光背に定印弥陀座像と思われる仏像を、正面上部に陽刻している。全体に風化が激しく、これも火災にあったのか赤茶けて錆びたような色をしている。総高は六十・五㎝、幅二十五㎝。像容の高さは二十・五㎝。背面は特に加工はされていない。

北青木墓地内⑥　六地蔵

四、路傍の石造遺物

①　北青木四丁目奥野家前の一石五輪塔

北青木四丁目四の奥野家と駐車場の間の前に、南向きに所在している。横と奥の三方をコンクリートブロックに囲まれて安置されており、完形品で総高は五十六・五㎝。花崗岩製。地輪正面に光景を意識したようにやや舟形に彫りくぼめられており、中に仏像が陽刻されている。風化しているが、弥陀定印を結んでいることから、阿弥陀如来の座像であろう。宝珠の形もふっくらとしており、全体の印象から、室町後期の物と思われる。なお、北青木四丁目十一の五輪卒塔婆の地輪部とほぼ同じ大きさで、像容も似ていることから、この一石五輪塔もまだ地輪部の下があったのかもしれない。また、このように地輪部が高く像容が彫られているものは、西摂地方に多く見られる。

北青木墓地内⑦　弥陀座像板碑

路傍①　一石五輪塔

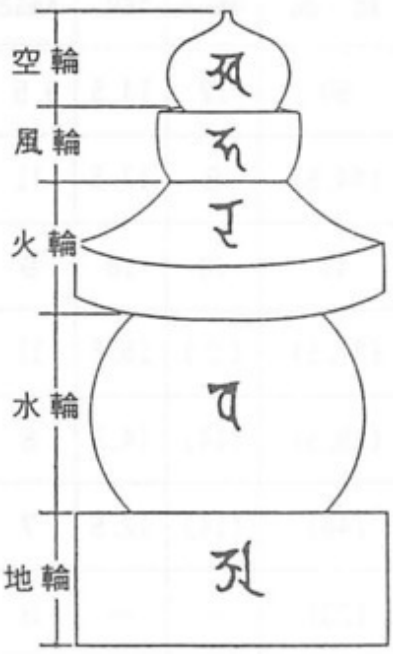
②　北青木四丁目駐車場前の一石五輪塔と石仏

北青木四丁目四－二十一の駐車場の北東隅にコンクリート製の祠の中に安置されている。元々は、道を挟んですぐ北側の三好家にあったという。戦前から現在地にもう移っていたといわれる。現在地のすぐ東の道路上に、セメントの跡が残っている。ここに建っていたが、道路が拡張されたので少し西の現在地に移動した。向かって左側には、やや上部の破損した舟形光背に仏像が陽刻されている。祠内が狭いため、石仏の奥行きは計測不能であったが、現高は三十四cm。最大幅は二十三cm。下部から十九cmの所に仏像が彫られている。膝と顔の部分はほとんど風化しているが、弥陀定印を結んでいるところから、阿弥陀如来の座像を彫ってあるものと思われる。室町末期ごろか。花崗岩製。もう一基は、やや板状になっている一石五輪塔で、先ほどの石仏もそうであるが、上部が黒くなっており、一石五輪塔の方は、全体に鉄を思わせる色合になっている。おそらく第二次世界大戦の時の空襲で焼けたものであろう。同じく祠内が狭いため、奥行きは計測できなかったが、現高四十cm。空輪の部分が欠落している。各部ともほぼ同じ幅で、十三cmある。地輪が長く一石五輪塔のなかでも、五輪卒塔婆と呼ばれるものである。この塔で注

路傍②　一石五輪塔

路傍②　弥陀石仏

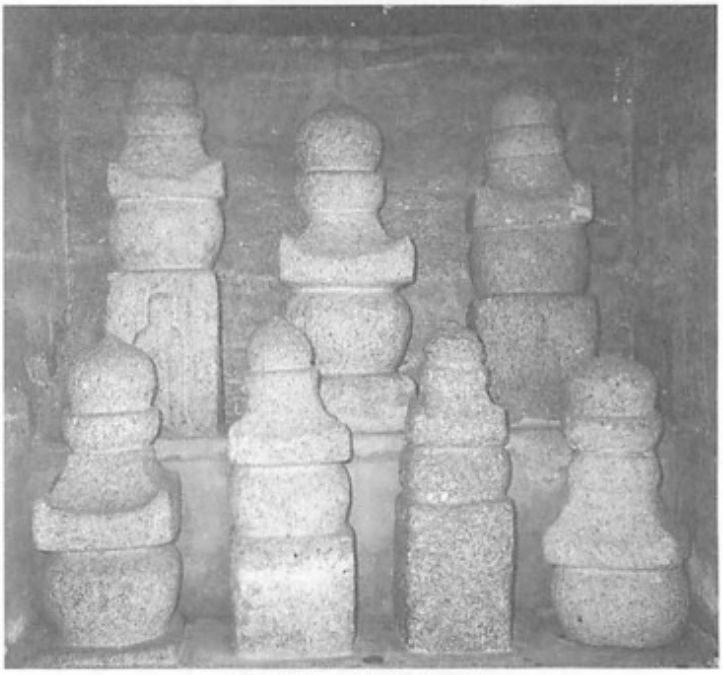
目されるのは、像容が水輪と地輪にまたがって彫られている点である。一石五輪塔に像容を彫る場合には、地輪に彫られるのが普通である。旧本庄村内で見られる一石五輪塔は、方柱状の物がほとんどであるが、この一石五輪塔はやや板状になっており、板碑を意識したものと思われる。そして火輪の笠の部分を切り込みと見立てて、以下の部分に、各部を意識せずに像容を刻んだのであろう。室町時代後期の物と思われる。花崗岩製。



五輪塔各部名称

③　西の坪橋東詰の一石五輪塔群

阪神電車青木駅の西側を流れる天井川に、線路と平行して架かる西の坪橋の東詰に所在する。三十年ほど前に、管理・世話をされているすぐ北側におられた式見氏が、ここにきてから祀りだした。天井川の川底掃除をしていた人が、川底から一体ずつ引き上げて、そのつど現在地のすぐ南の草むらに置いていたものを祀ったものである。そのため式見氏はこの石塔群を「川地蔵尊」と名付けている。コンクリート製の祠内に一石五輪塔ばかり、七基が安置されている。前後二列に置かれ、奥に三基、前に四基並んでいる。奥の向かって左からA・B・C、前も向かって左からD・E・F・Gとし、次頁に各部の計測値を表にした。Gは風輪の上に別石の空風輪を乗せている。その数値は、空輪高さ七・五cm、幅十cm。風輪高さ四cm、幅十一cm。


路傍③　一石五輪塔群

A塔は、地輪には地蔵立像が陽刻されている。光背は見られない。地輪とそれ以上の部分がずれている。笠の軒は、上部が端で強く反りかえっている。B塔は、地輪が半分以上埋もれている。宝珠はふっくらとしており、各部全体の形も良い。C塔は、地輪に仏像が彫られている。風化が激しくほとんどその像容はわからないが、阿弥陀

	総　高	地輪高さ	地輪幅	水輪高さ	水輪幅	火輪高さ	火輪幅	風輪高さ	風輪幅	空輪高さ	空輪幅
A	50	22	14.5	9.5	14.5	8.5	15	4	11	6	9
B	(44.5)	8	17.5	11	18	10.5	17.5	5	11.5	10	11.5
C	48	18	16	9	16	10	15.5	4	11	7	9.5
D	(37.5)	(2)	15.5	11	15.5	11	15.5	4.5	11	9	10
E	(39.5)	(14)	14.5	8	14	8	14.5	3.5	8.5	6	8
F	(40)	(18)	12.5	7	12.5	7	11	2.5	8	5.5	7
G	(23)	—	—	9	15	9	15	5	10	—	—

西の坪東詰一石五輪塔群各部計測値表　（単位：cm）

如来の座像と思われる。水輪は球形をなさず、全体にバランスが悪い。D塔は、地輪がほとんど埋もれている。B塔と同形式で、空風輪が他の塔より大きい。E塔は、A・C塔と同形式で、地輪も縦長である。F塔は、地輪が縦長で、A・C・E塔と同じであるが、笠の幅が短く各部の境目が曖昧に彫られている。G塔は、地輪と空輪が失われており、風輪の上に別石の空風輪が乗せられている。B・D塔と同形式。いずれも室町後期のものと思われるが、Fは江戸時代にかかる可能性が高い。

④　北青木四丁目十一の石造遺物群

西林寺の東にある中田家の南側に路地がある。この路地を東を向いて数十m進むと、北へ折れ曲がる場所に出る。そこに西を向いて、木の屋根囲いをした石造遺物が見られる。向かって左から五輪卒塔婆の地輪部・一石五輪塔・弥陀座像石仏・地蔵石仏が並んでいる。五輪卒塔婆の地輪部は、現高は四十三・五cmで、最下部には根部と呼ばれる土に埋まっている部分が十二・五cm存在する。幅は十七cmで、奥行は十六cm。像容は風化しているが、弥陀如来の座像と思わ

路傍④　五輪卒塔婆地輪部

れる。像容の回りは舟型に彫りくぼめられている。花崗岩製。一石五輪塔は、総高六十三㎝。完形品である。

空輪は本来の宝珠の形をせず、お碗を伏せたようになっている。風輪と火輪の間で若干ねじれており、水輪は球形をなしていない。室町末期の物であろう。花崗岩製。

弥陀座像石仏は、現高六十一㎝。全体に風化が激しく、阿弥陀如来の座像が遺物の上部に辛うじて判別できる。像容の回りは、風化で判別しにくいが、彫り窪められている形跡はない。花崗岩製。

地蔵石仏は、総高三十三・五㎝。舟形光背に、半肉彫で陽刻されている。頭部に梵字「カ」が刻まれ、像容の向かって左に「明治二十年二月十六日」、右にも銘文があるが判読できない。花崗岩製。

なお、現在はこの四基の石造遺物は、阪神・淡路大震災後に所在不明になっている。

⑤　北青木四丁目の地蔵石仏

春日神社の南の道を東へ行くと、紙谷家の南東角に敷地の一部に祠を建てている。ブロック塀に挟まれて道路に面している。小さいがしっかりした祠で、中に花崗岩製で、顔に少し彩色をした地蔵座像石仏が安置されている。石仏の後には般若心経が書かれた紙が置かれている。紙谷家のおばあさんが生前祀ったもので、昭和三十年前後の物だということである。

路傍④　地蔵石仏

路傍⑤　地蔵石仏

四、おわりに

以上が西青木地域の石造遺物調査報告である。中世の物と思われる遺物も多く、貴重な資料となるであろう。また、しばしば氾濫をしている天井川のすぐ東に位置する地理的状況から、西の坪橋東詰の一石五輪塔群のように、上流から流されてきて、いつの時代かに祀られているものもあると思われる。路傍の遺物は、祠内におさめられ、大切に祀られているが、このまま貴重に資料が守られていくことを願ってやまない。なお、本文中の写真は筆者が撮影したものである。最後になったが、石造遺物の分布については北青木在住の福井義明氏に、石造遺物の知識をはじめ、報告内容全般に当たっては歴史考古学研究会理事の鈴木武氏（青木在住）に多大なご教示をいただいた、記して感謝申し上げます。

史料館日誌抄

史料館研究員　道谷　卓

〈平成八年〉

5月3日　深江だんじり再建お披露目会のため特別開館
5月23日　神戸婦人大学（見学者十一名）
6月26日　東灘区役所新規採用職員研修（見学者二十七名）
6月28日　東灘区役所新規採用職員研修（見学者二十六名）
11月4日　第一回本庄村史連続市民講演会
講師　田中眞吾氏「東灘の大地の成り立ち」
大国正美氏「本庄地区の古文書の伝来と村史編纂の経過」
（深江会館　参加者三十二名）

〈平成九年〉

1月18日　魚崎小学校三年生（見学者一六一名）
1月26日　第二回本庄村史連続市民講演会
講師　西谷地晴美氏「中世の本庄地域」
佐々木和子氏「川西航空機甲南製作所と爆撃」
（深江会館　参加者三十七名）
1月31日　本山南小学校三年生（見学者七十三名）
本山第一小学校三年生（見学者一一三名）
2月1日　福池小学校三年生（見学者八十一名）
2月7日　本山第三小学校三年生（見学者九十八名）
2月10日　神戸大学附属住吉小学校三年生（見学者一一〇名）
2月14日　御影北小学校三年生（見学者一二七名）
2月15日　東灘小学校三年生（見学者一三二名）
2月26日　福住小学校三年生（見学者五十三名）
2月28日　AM神戸「露の団六のニュース大通り」で史料館を紹介
3月7日　芦屋市立三条小学校三年生（見学者三十五名）
4月13日　第三回本庄村史連続市民講演会
講師　杉浦昭典氏「神戸商船学校のあゆみ」
下久保恵子氏「深江の漁業」
（深江会館　参加者四十五名）
6月23日　東灘区役所新規採用職員研修（見学者三十五名）
7月6日　第四回本庄村史連続市民講演会
講師　奥村弘氏「東灘地域の明治維新」
道谷卓氏「旧本庄村の史跡について」
（深江会館　参加者四十二名）
10月4日　東灘まちづくり国際フォーラム―開港一三〇年と海の新時代―
・会場の一つとして史料館を公開
（神戸商船大学　参加者二〇〇名）
10月12日　神戸青年セミナー（見学者十五名）

●訂正とお詫び

前号（二十二号）において次のような訂正がありました。
・四頁上段二十二行目「大正三年に、住吉川の荒神山に火葬場ができるまでは、」→「昭和九年に区画整理が完了するまでは、」
・十二頁下段十四行目「津村容子」→「津村宮子」
ご迷惑をおかけした関係者・各機関にお詫び申し上げます。

『生活文化史』　第23号　98・3・10
編　集／望月　浩
発　行／神戸深江生活文化史料館
〒658-0021　神戸市東灘区深江本町3-5-7
☎　078-453-4980（FAX兼用）